



■令和5年度県総体を終えて一地域からもらう力、地域に与える力

5月の県総体壮行式では、“今を完全燃焼する”ことに集中して県総体に向き合ってもらいたい「今が大事なんだ！」と激励して選手の皆さんを送り出しました。私も、松江から益田まで可能な限り各部の応援に出かけさせていただきました。各競技会場では、その一瞬にかけるひたむきな姿勢に出会うことができました。最終回に逆転し優勝した男子ソフトボール部、最終回に得点され涙の準優勝となった女子ソフトボール部、準決勝0-1で敗れ決勝進出がかなわなかったサッカー部、第1セットを先取しながら1-2でベスト8進出を逸した女子バレーボール部、この他、男女バスケットボール部、陸上競技部、卓球部、剣道部の選手の皆さんが「今の瞬間」に向き合い熱い戦いを繰り広げてくれました。結果として勝ち負けはつきますが、結果に至るまでの過程においてどのくらいの充足感・達成感が得られたのでしょうか？勝者として喜びを分かち合う姿にはもちろん感動しますが、敗者として涙を流すその姿に一層共感を覚える自分がいます。私が部活動顧問をしていた頃、部員にはあえて「負けて泣くのではなく勝って泣こう」と鼓舞していましたが、歳を重ね異なった視点から見るその涙には、一人一人の思いや感情が思い浮かばれ、時に美しささえ感じられます。どうかこの経験を糧にして、次のステージに向かって新たな一歩を踏み出して欲しいと願っています。

各競技会場の応援席には、保護者の皆様とともに、小・中学生の頃に指導をしていたという方も多くいらっしゃいました。選手が小学校の頃、地域の少年チームで指導していたある指導者の方は「高校総体は選手にとっても私たちにとってもこれまでの競技生活の集大成の場だと思っています。一生懸命試合に向き合っている選手の姿を見て『子どもの頃から指導してきてよかったな』と感じています。」とおっしゃっていました。同様の言葉は、複数の会場で耳にしました。生徒の皆さんのひたむきな姿は、「地域を元気に。地域の恩返しを。」とあえてことばで表さなくても、間違いなく地域に元気をもたらしています。小さい頃に地域で育ててもらった子どもたちが大きくなって地域に恩返しをしている、地域からもらった力を地域に還元しているんだなと感じました。

サッカー部は初戦の出雲工業戦を延長後半からの逆転勝ちで突破すると、勢いに乗って創部以来の快挙であるベスト4まで駆け上がりました。決勝進出をかけた立正大松南戦では、急遽生徒に応援希望を募りバス4台、約200名の生徒・教職員の大応援団が駆けつけました。残念ながら0-1で敗れ決勝進出はなりませんでしたが、優勝チーム相手に大健闘の戦いでした。まさしく記録にも記憶にも残る試合でした。大会優秀選手にも選ばれた飯塚主将は、総体報告会で「今までベスト8に進出できなくて悔しがっていた僕たちが今は決勝に進出できなかったことを悔しがっている。全校の皆さんに応援してもらえる部活になったんだと感じました。」と話しました。多くの生徒が大声を出して懸命に友達を応援する。まさに学校全体が目標に向かって一つになるという一体感を感じました。コロナ禍には決して見られなかった光景がそこにはありました。やっぱり「青春って、すごく密なので…」ね。